

(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

The logo for the Religious Information Research Center (RIIRC) features the acronym "RIIRC" in a bold, green, serif font. The letters are underlined with a thick black line. The logo is set against a light yellow circular background.

宗教情報リサーチセンター

「ラク便利」研究ノート・小特集

→他の研究ノート・小特集のバックナンバーは**こちら**をご覧ください。

*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

研究ノート

メディアは『1Q84』をどう読んだのか？

—「システム」としての〈現代宗教〉—

高橋 典史

はじめに

周知の通り、2009、2010年の出版界を最も賑わせた話題の1つが、村上春樹『1Q84』BOOK 1～3（新潮社）の刊行であった。2009年発売のBOOK 1・BOOK 2は同年だけで合計200万部近くを売り上げるベストセラーとなり（朝日・東京 2010/1/1）、2010年のBOOK 3も、発売からわずか12日間で

発行部数100万部を突破した（日経・東京 4/28）。

この『1Q84』フィーバーともいふべき社会現象を振り返ってみると、メディアが「宗教」という側面から同書をさかんに取り上げていたことは興味深い。それでは、メディアは『1Q84』のいかなる部分に宗教に関わる関心を寄せ、それを社会へと発信してきたのだろうか。

本稿では新聞や雑誌における『1Q84』の報道のされ方の考察から、村上春樹という世界的人気作家が文学作品を通して描く〈現代宗教〉に関わる問題に対し、人びとがどのような関心を抱いたのかを明らかにすることに焦点を絞って論じたい。

本稿ではまず、『1Q84』のストーリーと作者・村上春樹じしんの作品についてのコメントを紹介したうえで、(1) BOOK 1・BOOK 2 が発行された2009年5月から2010年3月までの、(2) BOOK 3 が発売された2010年4月以降の新聞・雑誌のおもだった報道をそれぞれ検討する。

内容面、とりわけ宗教的なトピックの取り上げ方からいえば、さまざまな社会問題や宗教的な題材がちりばめられたBOOK 1・BOOK 2と、恋愛とサスペンスを中心にストーリーが進むBOOK 3のあいだには大きな開きが存在する。本稿では、BOOK 1・BOOK 2で取り上げられた現代の宗教問題に関わるトピックのその後の展開を期待していたメディアが、そうした「肩すかし」に対してどのような反応を示したのかといった問題についても取り上げたい。

『1Q84』と村上春樹

『1Q84』BOOK 1 (4月-6月)・BOOK 2 (7月-9月)の舞台は1984年の東京。いまだ出会うぬ主人公2人のエピソードが、語り手によって交互に語られていく。1人目の主人公の名は「青豆」。表向きはスポーツインストラクターだが、裏では家庭内暴力で妻に危害を加える夫たちを標的とした殺し屋の女である。彼女は「証人会」という宗教教団の熱心な信者である両親のもとで育った。もう1人の主人公は、小説家志望の予備校教師「天吾」。彼の父親は、NHKの受信料の集金人を長年勤めあげた堅実で朴訥とした人物である。

小学生の一時期をクラスメイトとして過ごした2人であるが、その後は交流を持っていない。またそれぞれ家族との関わりもなく、孤独な日々を暮らしていた。1984年、彼らは30歳と

いう年齢を迎えようとしている。

作品のタイトルでもある「1Q84」は、1984年の東京のパラレルワールドともいうべき世界である。空には2つの月が浮かんでいる。この世界が出現したとき、2人の主人公の人生は大きく動き始める。いわゆる「カルト」を連想させる宗教教団「さきがけ」、青豆に暗殺されるその教団のカリスマ的リーダー、その娘で謎めいた美少女作家ふかえり(ふかえりの小説は彼女のアイデアをもとに天吾が代作している)、そして物語全体の鍵となる「リトル・ピープル」という不可思議な存在——、それらが複雑に絡み合いながら作品は展開される。そんな中で、これまで全く別々の人生を歩んできた青豆と天吾が、宗教教団「さきがけ」を軸に次第に引き寄せられていくのである。BOOK 1・BOOK 2の時点では、主人公2人はまだ出会ってもない。

BOOK 3 (10月-12月)では、「さきがけ」に雇われた中年の探偵が、脇役から3人目の主人公に昇格し、作品のサスペンス的な要素における重要な役割を担うようになる。この男は、教団のリーダーを暗殺した青豆の行方を追っている。追われる身の青豆は、あるときを境にじしんの胎内に新たな生命が宿っていることを確信する。誰の子であるかは明らかではなく、人ならぬ何かによって懐胎させられたといった筆致である。妊娠した(と思い込んでいる)青豆は、天吾とともに元の世界——1984年の東京へと戻ることを決意する。そして、ついに高円寺で小学生以来の再会を果たした青豆と天吾は、1つだけの月が浮ぶ元の世界へ向かうのだった。このように「さきがけ」のリーダー暗殺をめぐるサスペンスと、青豆と天吾のラブロマンスを中心にして展開するのが、BOOK 3である。

以上の『1Q84』のあらすじからだけでも、非常に宗教的な要素の多い作品であることが読み取れるだろう。BOOK 1・BOOK 2におけるそうした点については、すでに宗教社会

学者の井上順孝が詳しく論じている（井上順孝「見かけから自由になれるか？——信仰が紡ぎ出す「二つの世界」」『1Q84 スタディーズBOOK 1』若草書房、2009年）。それゆえ、ここでは同論考を参考にして、重要と思われるポイントを挙げておきたい。

まず、『1Q84』には、「証人会」、「タカシマ塾」、「さきがけ」、「あけぼの」といった宗教的な組織が多く登場する。「証人会」は実在する「エホバの証人」を、「タカシマ塾」、「さきがけ」、「あけぼの」は山岸会やオウム真理教を彷彿とさせる。また、周囲の人びととのあいだに強い影響関係を結ぶことができるカリスマ的な教祖のような「さきがけ」のリーダー、終末論的雰囲気漂う2つの月に象徴されるもう1つの世界「1Q84」、ジョージ・オーウェルの『1984』の「ビッグ・ブラザー」と対比される謎の妖精的存在「リトル・ピープル」、そして物語世界の核になると思われる「空気さなぎ」など、宗教的な素材が多く登場する。

そもそも、現代における宗教問題への関心は、著者の村上春樹が以前より強く抱いてきたものだ。1995年3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件に大きな衝撃を受けた村上は、事件の被害者60名以上にインタビューを行って『アンダーグラウンド』（講談社、1997年）を発表しているし、8人のオウム信者に話を聞いて著した『約束された場所で』（文芸春秋社、1998年）も出版している。村上じしんの発言によれば、その後もオウム真理教関連の裁判の傍聴に通い続けてきたという（読売・東京 2009/6/16）。

ただし、留意しておきたいのは、作品中に登場する「カルト」的な宗教教団である「さきがけ」は、そもそも学生運動の流れから生まれたグループが、過激な政治的集団（「あけぼの」と自給自足的な生活を志向する集団へと分裂した結果、後者が展開していったものであり、オウム真理教そのものとは来歴や性質が異なっているという点である。村上じしんは次のよ

うに語っている。

カウンターカルチャーや革命、マルクスズムが60年代後半から70年代初めに盛り上がって、それがつぶされ、分裂していきます。連合赤軍のように先鋭的な、暴力的な方向と、コミューン的な志向とに。そして連合赤軍事件で革命的ムーブメントがつぶされた後は、エコロジーやニューエイジへ行くわけです。連合赤軍に行くべくして行ったと同じ意味合いで、オウム的なものも生まれるべくして生まれたという認識があります（毎日・東京 2009/9/17）。

そして、作品全体のテーマに関して、村上は別の新聞で次のように説明している。

オウム事件は現代社会における「倫理」とは何かという、大きな問題をわれわれに突きつけた。……絶対に正しい意見、行動はこれだと、社会的倫理を一面的にとらえるのが非常に困難な時代だ。……体制の中に反体制があり、反体制の中に体制がある。そのような現代社会のシステム全体を小説にしたかった（読売・東京 2009/6/16）。

ここでいう「体制」もしくは「システム」といった言葉は、2009年2月15日、イスラエルの文学賞「エルサレム賞」の受賞の際、村上が行ったスピーチにも出てきたものだ。イスラエル軍によるガザ地区への攻撃についての批判的な言及も行った同スピーチでは、「システム（もしくは体制）」という語が、かけがえのない個人1人ひとりの魂を傷つけることもありうる国家や集団一般（そこには宗教集団なども含まれるだろう）を名指すものとして用いられており、そうした「システム」の負の側面への警戒や批判のために作品を書き続けることが、小説家としての自分の責務であると語った（毎日・東京・夕 2009/3/2、毎日・

東京・夕 2009/3/3)。

いずれせよ、これまでの村上作品と同様、『1Q84』も全共闘世代のメンタリティーが前提となっている。そのうえで、人びとを絡め取りかねない恐れのある大小さまざまな現代の「システム」全般に対する強い警戒心のもとに物語が描かれているのである。そのため、作中に登場する宗教集団を、現実社会に実在する特定の教団と過度に結びつけて作品を読んでもしまうことは、著者の意図するものではないようだ。村上は以下のように説明している。

僕が問題にしているのはもっと内的というか、精神的な状況です。オウム事件が引き起された、あるいはオウム事件がもたらした、プレオウム、ポストオウムの心的状況、おそらく我々1人ひとりの中にも潜んでいるはずのそういう暗闇のようなもの、僕が問題にしたかったのはそういうものです(考える人 2010年夏号)。

こういった新聞や雑誌での発言を総合すると、村上が問題視し、『1Q84』のテーマとした「システム」とは、オーウェルが『1984』の中で描いたような国家や社会体制といった大きな「システム」が問題となっていた時代以後の、無数の小さな「システム」による人びとの精神の侵食であるといえよう。そして、この小さな「システム」には、「リトル・ピープル」に象徴される人間の深層心理の根底に存在するプリミティブで原宗教的な集合的無意識・記憶のようなものも含まれる(また、そうしたインタビューでは「原理主義」への危惧について、たびたび言及している点も注目に値する)。

その意味では、村上が『1Q84』の中で特に重視している「システム」としての「宗教」とは、我われが常識的にイメージする教団、教義・思想、儀礼といった実体的なレベルでの宗教というよりも、個々人の精神の内奥にある原初的な宗教性であるといえる。もちろん、人間の精神を拘束し、突き動かすものと考え

られている深層心理への村上の関心は、これまでの作品にもみられることであり、臨床心理学者の河合隼雄との交流はそれを端的に示している(『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』岩波書店、1996年)。

そうであるならば、『1Q84』(および他の村上作品)を、仏教・キリスト教・新宗教・「カルト」といった具体的な宗教を正面から題材にしたような文学・小説の文脈に位置づけるべきではないのかもしれない。例えば、『日経おとなのOFF』の特集「死とは何か 臨終の作法とは?」では、柳田國男『遠野物語』、泉鏡花『草迷宮』、折口信夫『死者の書』、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』、三島由紀夫『豊穡の海(四部作)』、大江健三郎『同時代ゲーム』、といった死と異界をめぐる文学の系譜の中に村上作品を置いている(該当箇所の監修は文芸評論家の安藤礼二)(日経おとなのOFF 2010年12月号)。

とはいえ、すでに述べたように本稿の関心は、テキストの精確な読解ではなく、人びとがBOOK 1・BOOK 2から宗教に関わるいかなる問題群を読み取ろうとし、それらに関連したどのような期待をBOOK 3に対して抱いていたのかを、一般の新聞・雑誌の報道の検討から明らかにすることにある。それでは次節以降、BOOK 1・BOOK 2のメディアでの紹介および評価の特徴をあぶり出してみよう。

2009年5月～2010年3月——BOOK 1・BOOK 2

BOOK 1・BOOK 2は2009年5月29日に発売され、またたく間にベストセラーとなった。この頃の主要な新聞では作品の宗教的な要素に注目する記事が目立った。例えば、発売翌日の『毎日新聞』は、「1984年の日本を舞台にカルト教団の謎を描いている」といった紹介をし(毎日・東京 2009/5/30)、また、『東京新聞』でも「大波小波」欄に「カルトと人間の真実」と見出しを付して、『仮想儀礼』(篠

田節子著、新潮社、2008年）、『霊降ろし』（田山朔美著、文芸春秋、2009年）とともに『1Q84』を挙げ、同書を次のように紹介した。

村上春樹の新作『1Q84』（新潮社）はカルト教団を題材にした小説だった。1990年代に、オウム真理教に関する分厚いノンフィクションを二冊書き、短編集『神の子どもたちはみな踊る』で超越者による救済の問題を扱ったのは本気だったのだ（東京・東京・夕 2009/6/10）。

『朝日新聞』では、「扉」欄で「新著にはオウム真理教に構想を得たと思われる宗教団体が描かれ」としているとし、『アンダーグラウンド』における問題意識の延長線上に『1Q84』を位置づけて紹介している（朝日・東京 2009/6/21）。同紙はまた、文化面で『1Q84』の特集を組み、「カルト」やオウム真理教といった言葉は出さないものの、「代表作の要素 集大成」「宗教と暴力・純愛…」といった見出しを載せ、「宗教と暴力」という視点から『1Q84』を解説した（朝日・東京 2009/6/23）。

『読売新聞』も「2009 文学 6月」欄で文化部の記者が『1Q84』を紹介しているが、ここでも阪神・淡路大震災とともに、オウム真理教による地下鉄サリン事件が同作品に与えた影響を示唆している。また、主人公の1人である天吾が父親と向き合うエピソードは、これまでの村上作品にはない要素であり、「日本の近代文学の伝統に連なる」と評価している点も興味深い（読売・東京 2009/6/30）。

また、『山口新聞』は、『1Q84』の書評（評者は文芸評論家の横尾和博）を「カルト扱った寓意と象徴の物語」という見出しをつけて掲載し、書評中には「テーマはカルトに象徴される、人間にとりつく独善的、排他的な観念、それが悪や暴力へと人を突き動かす不可思議を解こうとする」といった文章がある（山口 2009/6/21）。なお、同書評は『神奈川新聞』にも掲載されており、その際には「カルトが

象徴する独善」といった見出しが付けられた（神奈川・横浜 2009/6/28）。

それでは、一般の雑誌に関しては、『1Q84』の宗教的な要素をどのように取り上げていったのだろうか。その多くは書評というかたちを取っている。しかし、概括するならば、いわゆる文芸評論家の多くは、『1Q84』の宗教や「システム」といった問題には、それほど注目していないように見受けられる。ここでは、そうした問題にあるていど言及している書評をいくつか挙げてみたい。

『週刊文春』では評者の内田樹（フランス現代思想研究者）が、エルサレム賞の受賞スピーチでは「邪悪なもの」として言及された「システム」が、作品中では「リトル・ピープル」と名づけられている点や、これまでの作品とは異なり、今作では「父」の問題が前景化し、子どもや配偶者を守ることでできない弱く「小さな父」たち＝「リトル・ピープル」から「子ども」たちを救うことがテーマとなっている点などを論じている（文春 2009/6/18号）。

また、『アサヒ芸能』の評者の永江朗（書評家・コラムニスト）は、実在する教団を連想させる「カルト集団」が多く登場するという本作品の特徴を指摘し、よりストレートに邪悪な勢力である「カルト」と2人の主人公との対決という構図を示した（アサヒ芸能 2009/6/18号）。再び『週刊文春』では、分子生物学者の福岡伸一が、宗教組織の教祖を通じて世界を支配しようとした「リトル・ピープル」と2人の主人公との対立というストーリーを読み取り、謎の存在「リトル・ピープル」を「ビッグ・ブラザー」に代わる遺伝子的なもの（人間の内的な支配者）と解釈している（文春 2009/6/25号）。さらに、『ダヴィンチ』は『1Q84』をよりのしむための、村上春樹文庫」と題した特集の中で、以下のように解説する。

村上ワールドの表のテーマが〈イノセンス〉の喪失だとすれば、裏テーマは〈見えないシステムに抗うこと〉。バブルへと向かう時代、すなわち『ダンス・ダンス・ダンス』までそれは高度資本主義だった。『ねじまき鳥クロニクル』以降、矛先は歴史へと向かう。『アンダーグラウンド』を挟んで『1Q84』ではついに宗教が俎上に。カルト教団「さきがけ」のリーダーもリトル・ピープルという〈システム〉の傀儡なのか(ダヴィンチ 2009年11月号)。

また、『一個人』も「村上春樹「1Q84」を解剖！」という特集(文章は文芸評論家の鈴木和成)を組み、『1Q84』を読み解く3つのキーワードの1つに、「カルト宗教と終末論」(「宗教の原理主義と現代人の問題は『1Q84』の重要なテーマ」という文句も付されている)を挙げた(一個人 2010年1月号)。

一方、これらの書評・解説とはだいぶ異なる『1Q84』論を展開している人物に安藤礼二がいる。『新潮』に掲載された「王国の到来 村上春樹『1Q84』と題された論考の中で安藤は、『1Q84』流にいうならば「リトル・ピープル」のような) 異界の「声を聞くもの」としての古代の天皇のあり方を指摘した民俗学者の折口信夫の「ミコトモチ」論を手がかりにして、村上が対峙する「システム」とは、「超古代的でありながら「近代そのもの」を体現した支配のシステム」である近代天皇制だと指摘する。そして、この近代天皇制の擬似システムを体現したオウム真理教事件(1982年の時点で『羊をめぐる冒険』の作中に同種の集団を創出してしまっていた村上が、一連の事件から、自らが作り出した物語を模倣されたような衝撃を受けることとなったとも安藤は推測している)が、本作品執筆の直接的な動機であるとする。そうした異界からの声によって発動される古代的でありかつ近代的である近代天皇制的なシステムじたいを、自らの物語の力で葬り去ることが、『1Q84』の目的であったという(新

潮 2009年9月号)。

以上のように、それぞれの新聞や雑誌、評者ごとに解釈が異なっている部分はもちろん少なくないものの、BOOK 1・BOOK 2が刊行された2009年時においては、『1Q84』における宗教的なモチーフ、とりわけ「カルト」の問題が、広く一般に注目されていたことがわかるだろう。そして、そこに通底しているのは、現代において宗教という「システム」がはらむ問題(「カルト」や「原理主義」)は、いかにして乗り越えることができるのかという関心であり、その方途を『1Q84』に期待したという点であったとひとまずはいえそうである。

2010年4月以降——BOOK 3

2010年4月16日、事前には出版社側からは一切の内容が明かされないまま、BOOK 3は全国一斉に発売が開始された。この出版社の異例の販売戦略も功を奏し、BOOK 1・BOOK 2同様、BOOK 3も順調に売り上げを伸ばしていった。

前述したように、BOOK 3では青豆と天吾の「ラブストーリー」がサスペンスと絡められつつ語られていき、「カルト」問題や倫理といったBOOK 1・BOOK 2で提起された硬派な問題は表舞台から消えてしまった印象を受ける。BOOK 1・BOOK 2で明確に提示された「システム」としての現代宗教に対する問題意識は、BOOK 3ではほとんど解き明かされないまま終わってしまうのだ。それはむしろ筆者の個人的な印象ではない。例えば、石原千秋(近代日本文学研究者)、松永美穂(ドイツ文学者)、菅野昭正(文芸評論家)の3人も、奇しくも同紙上の書評において、そうした現代社会における宗教の問題性といったものがBOOK 3では前面から消えてしまっている点を指摘している(東京・夕 2010/4/27)。

もっとも、村上じしん、「3はもちろん話として、1,2の続きではあるんだけど、作品としては「別もの」だと僕は認識しています。意識的にもか

なり違ったところで書かれたものです」(考える人 2010年夏号)と語っているのだが。

それでは、一般の新聞・雑誌上で『1Q84』はどのように紹介されていたのかをみてみよう。まず、BOOK 3の内容を反映してか、BOOK 1・BOOK 2のときのように「宗教」や「カルト」といった言葉が並ばなくなった点が、全体的な特徴であるといえる。『朝日新聞』では、「解かれる謎と究極の純愛」といった見出しをつけ、文芸評論家の斎藤美奈子の読後のコメントを掲載した。斎藤は皮肉も込めて次のような文章で締めくくっている。

150 ページすぎで「えっ、そっち!？」と思ったが、読者の希望にピタッと沿った注文建築なみの親切設計。究極の純愛小説はお伽話に限りなく近づく。っていうか、これはもう神話か聖書の世界ですね(朝日・東京 2010/4/17)。

また、『毎日新聞』に掲載された文芸評論家の清水良典による書評でも、「……こんなに読者に親切に書かれた小説を、この作家で読んだことがあったらどうか。まさにサービス満点の完結編なのである」と評価されている(毎日・東京・夕 2010/4/22)。さらに、『東京新聞』の沼野充義(ロシア東欧文学・現代文学論)の筆による「文芸時評」欄にも、次のような言葉がある。

……BOOK 2までに仕掛けられていた謎や重い倫理的な問題の数々は、十分に解き明かされないまま、語りそのものが恐ろしい地雷原からロマンティックなラブストーリーへと撤退していったという印象が残ることも否めない。この撤退は決して悪いものではない(東京・東京・夕 2010/4/30)。

しかし、このような青豆と天吾の「ラブ

ストーリー」を中心にして物語が完結したとし、大団円という点からBOOK 3を紹介・批評するものだけでなく、物語の消化不良感を示してBOOK 4の刊行を予測した報道も少なくない。

例えば、『日本経済新聞』は率直に「「純愛」に賛否」という見出しをつけ、「ラブストーリー化」の一方で、BOOK 1・BOOK 2で提起された「カルト宗教や暴力、善悪などの問題は後景に退いた感がある」などと指摘し、BOOK 4の刊行を予想する識者の言葉を載せるなどして、続編への読者たちの期待に言及している(日経・東京・夕 2010/4/27)。

また、『しんぶん赤旗』でも、『1Q84』の近年まれにみるブームとBOOK 3の内容に対する違和感を述べたさまざまな識者たちの言葉を掲載し、疑問符つきではあるがBOOK 4の可能性を示した(赤旗・日曜版 2010/5/9)。『サンデー毎日』にいたっては、「書評で読む『1Q84 BOOK 3』」という特集内で書評家の岡崎武志が、最終編としてのBOOK 4の存在を断定している(サンデー毎日 2010/5/23号)。

それでは、BOOK 1・BOOK 2において提起された「システム」の問題への解答は、BOOK 3では完全に無視されてしまったのだろうか。精神科医の斎藤環は、『朝日新聞』の書評において、「システム」(≡「リトル・ピープル」)に抗いうるものとして、BOOK 3が提示したのは「身体性」であると論じている。斎藤によれば、「善と悪の両義性を容れる唯一の「この身体」こそが、ただひとつの「この現実」を回復しうる。そう信じられる限りにおいて、青豆の妊娠は「必然」なのだ」という。そして、その「本当の意味」は青豆に宿った「この小さなもの」の物語によって明らかになるとして、BOOK 4の存在を予測した(朝日・東京 2010/4/25)。

別のところでも斎藤は、「村上春樹『1Q84 BOOK 3』の精神分析」という小論の中で、

国家権力による人びとの管理システムやグローバルな経済システムを例に挙げて、諸個人とシステムとの仮想身体的な関係性を指摘したうえで、そうしたシステムに抗うための、BOOK 3における「身体性の復権」を指摘している。それは、システムには不可能な青豆＝母による「妊娠」や、登場人物の中でも最も具体的かつ念入りに描写される中年の探偵、牛河の存在から看取できるとする。そして、そこでもBOOK 4をもってして『1Q84』は完結すると述べるのだった（Voice 2010年6月号）。

本稿執筆時点（2011年2月中旬）においては、BOOK 4が刊行されるかどうか不明なままである。とはいえ、本節でみてきたように、それまでBOOK 1・BOOK 2で示された「システム」やそれに関わる現代宗教の諸問題（「カルト」や原理主義）に人びとから大きな関心が寄せられていたがゆえに、2010年4月のBOOK 3発売以降の報道では、同書の内容に物足りなさを表明するものが少なくなかった。換言すると、現代の宗教問題への応答という点からみれば、多数の読者たち＝社会の側からの期待に、BOOK 3は十分にかなうものではなかったといえよう。

おわりに

以上、本稿のメディア報道の考察を通じて確認できたように、『1Q84』の社会に対する大きなアピール・ポイントの1つが、「カルト」などの現代の宗教問題であったという事実は、多数の人びとがそうした問題に関心を有しており、社会の側に潜在的な需要があったことを示すものだろう。また、そうしたものに関心を持っていなかった人びとも、メディアや作品じたいを通じて関心が喚起させられたこともありうる。

ただし、BOOK 1・BOOK 2で高まった期

待ゆえに、BOOK 3が読者にもたらした戸惑いや波紋じたいが、一種の狂騒であるとする意見もあることは傾聴に値する。次に挙げるジェイ・ルービン（日本文学者・翻訳家）との対談における小森陽一（近代日本文学研究）の辛らつな発言は、文学に対する村上の姿勢および、彼の作品が巻き起こした「ブーム」を丸ごと批判するものとして興味深い。少々長いが引用しておきたい。

……小説の中のディテールについて、その真に意味するところは何なのか、と、みんなが揃って世界の一大事であるかのように議論するという読者状況をつくるのが、村上春樹の意図なのでしょう。……ブランド化された小説の細部について、さも大事な話題でもあるかのように議論をして、現実に来ている問題には意識を閉ざす。……フィクションによって現実を批判的に捉え直すことが、小説の言葉の命なのではないか。それとはまったく違う方向に行っているのではないですか、村上さん、と言いたくなるのです（群像 2010年7月号）。

とはいえ、「カルト」にせよ、「原理主義」にせよ、現代の宗教のネガティブな側面に危惧を抱く人びとは多い。そうした重要な諸問題に切り込んで社会に問題提起したという意味で、現代宗教研究上、『1Q84』が看過できない存在であることは間違いない。BOOK 3への不満とBOOK 4への期待は、「システム」としての〈現代宗教〉がもたらす負の影響力に対し人びとが抱いている危機感が、それだけ深刻で喫緊なものとなっている証左であるかもしれない。